

◆ 今週のコメント

- ・ 感染性胃腸炎の定点当たり報告数は、8.83(353例)で、過去5年平均値を上回る報告数で推移しています。京都市衛生環境研究所では、病原体定点で採取された感染性胃腸炎検体において、ロタウイルスの検出が増えています。

感染性胃腸炎検体からのウイルス検出数

n= 感染性胃腸炎 検体数	1月 (n=18)	2月 (n=22)	3月* (n=14)
ノロウイルス	6	5	2
ロタウイルス	1	3	3

(*22日受付分まで)

- ・ 水痘の定点当たり報告数は、1.15(46例)で、第8週(2月21日～2月27日)以降増加しています。年齢階級別にみると、2歳が最も多く11例(23.9%)で、次いで1歳が10例(21.7%)となっており、1～5歳で80.4%を占めています。
- ・ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の定点当たり報告数は、1.10(44例)で、過去5年平均値を上回っています。

◆ 今週のトピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は、7.72(517例)で、第4週をピークに減少を続けていた報告数が増加に転じています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

ありません

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点67, 小児科定点40, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	7.72	517
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	8.83	353
	② 水痘	1.15	46
	③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.10	44
	④ 伝染性紅斑	0.30	12
	⑤ 流行性耳下腺炎	0.28	11
眼科	流行性角結膜炎	0.20	2

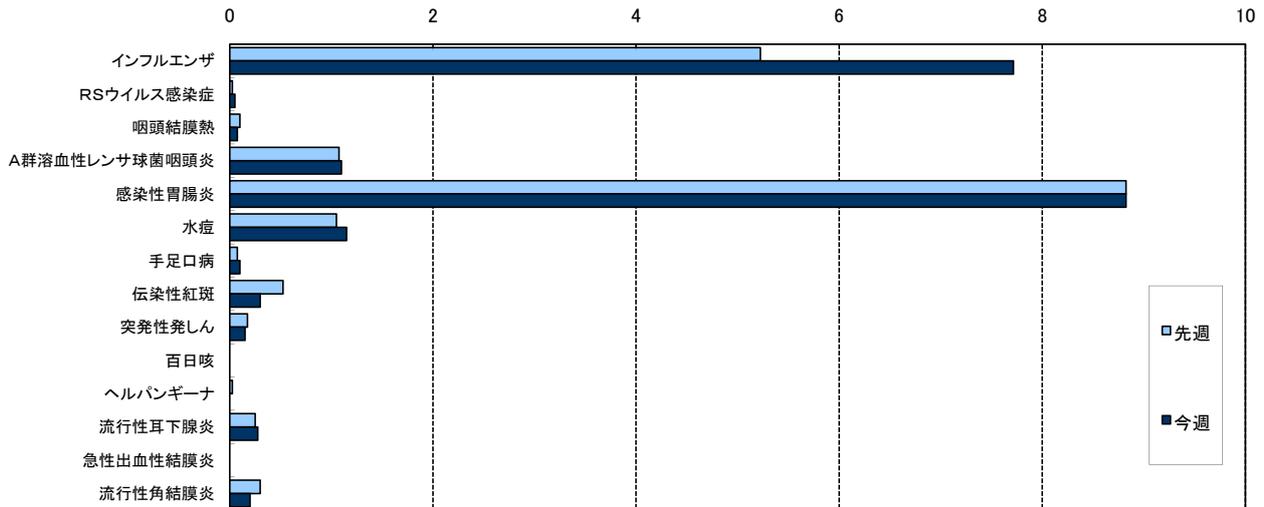
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <インフルエンザ>

(注) 京都市のデータは、平成23年3月24日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

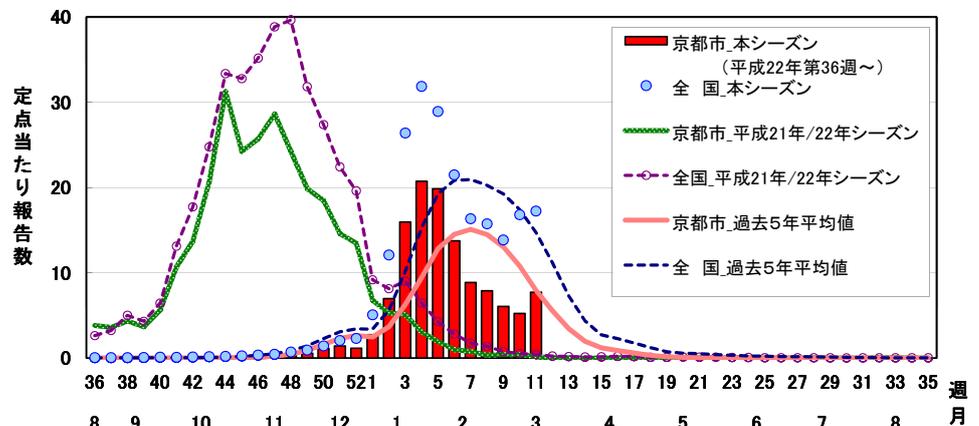
◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第11週)と先週(第10週)の定点当たり報告数の比較



2 インフルエンザの推移

週	報告数(例)
第7週	594
第8週	528
第9週	406
第10週	350
第11週	517
累積報告数 (第36週以降)	8,132

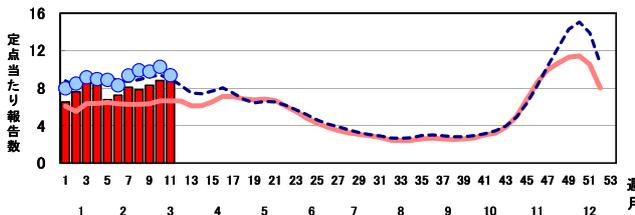


※平成21年/22年シーズンは、新型インフルエンザの発生により、例年と流行傾向が大きく異なるため、別に表記しています。

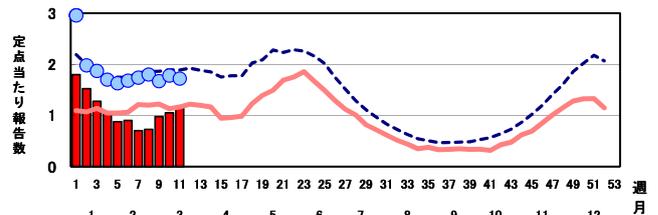
3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>

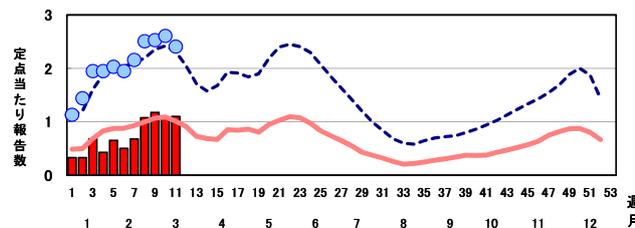
1 感染性胃腸炎



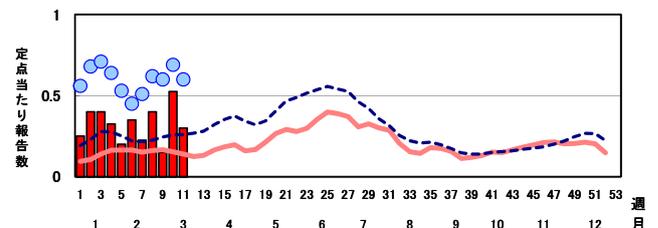
2 水痘



3 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

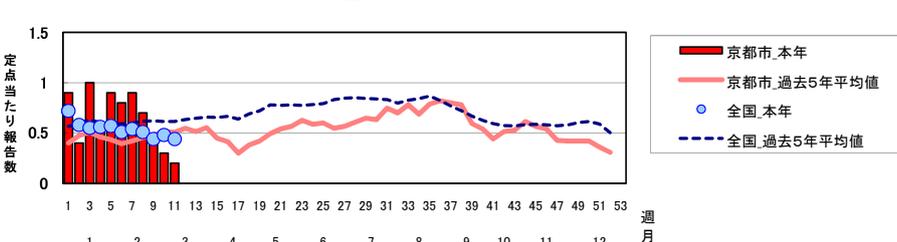


4 伝染性紅斑



<眼科定点>

流行性角結膜炎



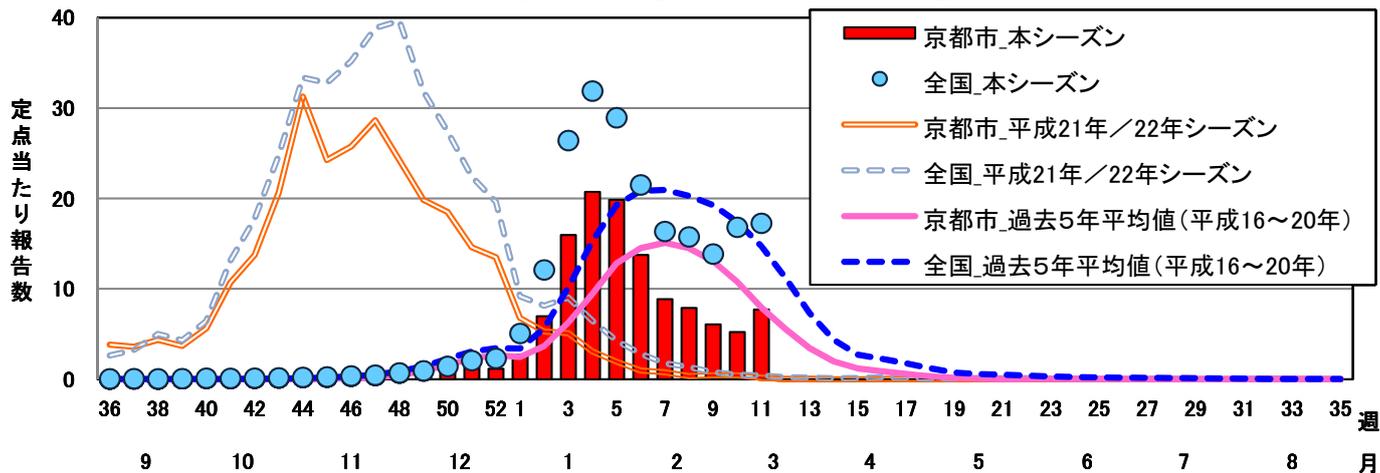
第11週(3月14日～3月20日)トピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は、7.72(517例)で、第4週をピークに減少を続けていた報告数が増加に転じ、3週間前(第8週:7.88, 528例)と同レベルとなっています。近畿6府県では、滋賀県、奈良県で先週からやや減少したものの、4府県で2週連続の増加となっています。

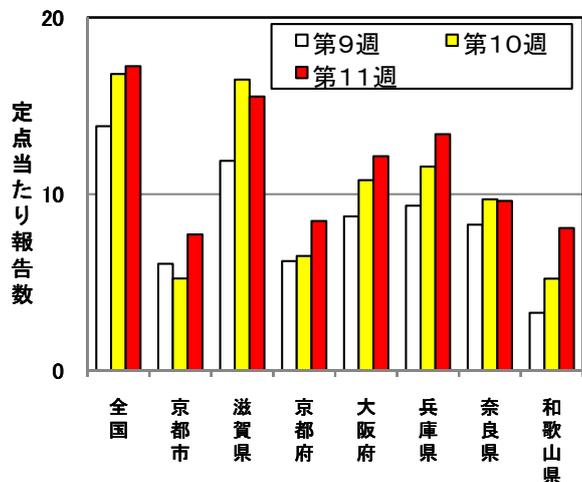
年齢階級別にみると、すべての年齢群で先週から増加しており、14歳以下が78.5%を占めています。

平成22年第44週(11月)以降の全国のインフルエンザウイルス検出状況をみると、AH1pdmの割合が12月以降、増加していましたが、第1週をピークに減少し、代わってAH3型、B型の割合が増加してきています。

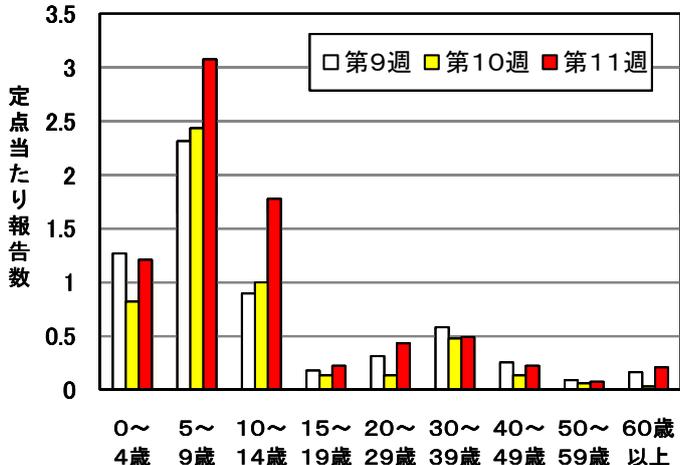
本市及び全国の定点当たり報告数の推移



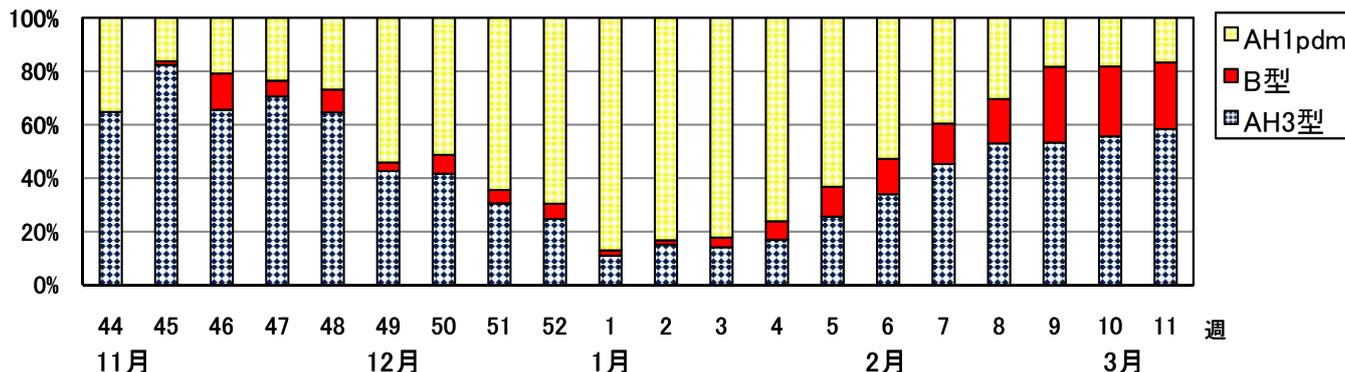
本市及び近畿6府県の定点当たり報告数の推移



年齢階級別定点当たり報告数の推移(本市)



全国のインフルエンザウイルス検出割合(平成22年第44週(11月)～)



病原微生物検出情報より(平成23年3月24日現在)